氏　　名	天野　功士 （あまの　こうじ）
学 位 の 種 類	博士（看護学）
学 位 授 与 番 号	甲博看第 9 号
学位授与年月日	令和 5 年 3 月 8 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 名	前立腺全摘除術後がん患者の下部尿路症状に対する自己管理尺度の開発 (Development of a Self-management Scale for Lower Urinary Tract Symptoms in Patients with Cancer after Radical Prostatectomy)
論 文 審 査 委 員	（主）　教授　草野　恵美子 教授　池西　悦子 教授　鈴木　久美

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

≪緒言≫

前立腺がん患者は，根治的前立腺全摘除術を受けることによって，術後に尿失禁や昼間頻尿，尿意切迫などの複雑な下部尿路症状（Lower Urinary Tract Symptoms, LUTS）を合併する．LUTS を有する前立腺全摘除術後がん患者は，身体活動や社会活動の制限を余儀なくされ，術後の Quality of Life（QoL）が低下する．また，抑うつ症状を認めやすく，心理面にも大きな影響を受ける．そのため，術後の LUTS および LUTS に関連する問題に対する自己管理が求められる．前立腺全摘除術後がん患者が，術後の LUTS および LUTS に関連する問題に対して，効果的に自己管理を行うためには，看護師は患者の自己管理状況を客観的に把握する必要があると考える．そこで，本研究は，前立腺全摘除術後がん患者の LUTS に対する自己管理尺度を開発することを目的とした．

≪目的≫

本研究は，前立腺全摘除術後がん患者の LUTS に対する自己管理尺度を開発することを目的とし，以下の三部で構成した．

第一部：前立腺全摘除術後がん患者の LUTS および QoL の経時的変化とそれらの関連を明らかにすることを目的とした．

第二部：前立腺全摘除術後がん患者の LUTS に対する自己管理の様相を明らかにすることを目的とした．

第三部：前立腺全摘除術後がん患者の LUTS に対する自己管理尺度（Self-Management Scale for LUTS in Patients with Cancer following Radical Prostatectomy: SMS-LUTS-RP）を開発し，信頼性と妥当性を検証することを目的とした．

≪対象と方法≫

第一部の研究では，対象者は前立腺全摘除術後がん患者，アウトカムは LUTS もしくは QoL の経時的変化とし，国内外 14 文献を対象にシステマティックレビューおよびメタアナリシスを行った．第二部の研究では，前立腺全摘術後がん患者を対象に半構造化面接を行い，得られたデータを Mayring の質的内容分析の手法を用いて分析した．第三部の研究では，前立腺全摘除術後に LUTS を有する 85 歳未満の患者 246 名を対象に，無記名自記式質問紙調査を実施した．尺度原案は，既存の自己管理の概念を基盤とし，前立腺全摘除術後がん患者の自己管理を「問題の特定」，「目標の設定」，「知識の探索」，「行動計画の実施」，「資源の活用」，「セルフモニタリング」の 6 つの構成概念から捉えた．LUTS に対する自己管理の項目は，患者への面接調査，第二部の研究で実施した看護師への質問紙調査，文献の 3 側面から抽出した．作成した SMS-LUTS-RP，基準関連妥当性を検討するための「キング健康調査票（The King's Health Questionnaire, KHQ）」，「国際前立腺症状スコア（International Prostate Symptom Score, IPSS）」を用いて，因子分析，信頼性分析，妥当性分析を行った．

≪結果および考察≫

第一部の研究結果として，患者の LUTS の経時的変化は，術前と比較して，術後 3 か月では変化がなく，6～12 か月で徐々に改善がみられ，12 か月ではほとんどの患者が LUTS の改善を認めていた．症状別の経時的変化として，昼間頻尿，夜間頻尿，尿意切迫を含む蓄尿症状は，術後 3 か月では術前よりも悪化しており，回復に時間を要していた．術後患者の QoL は，術前と比較して術後 12 か月で有意な改善を認めていた．患者の LUTS は，年齢，術前の LUTS，前立腺の治療歴などの身体的要因との関連が示されていたが，心理社会的な要因との関連性の検討に課題が残されていた．第二部の研究結果として，対象者は 13 名であり，前立腺全摘術後の LUTS に対する自己管理として，410 のコード，42 のサブカテゴリー，10 のカテゴリーが浮上した．カテゴリーとして，〔解決すべき問題の自覚〕，〔LUTS の対処方略の吟味〕，〔LUTS の改善につながる行動の取り入れ〕，〔LUTS の悪化をきたす行動の回避〕，〔生活への支障を見据えた工夫〕，〔LUTS によるトラブルへの対処〕，〔医療者や周囲との関係構築〕，〔排尿コントロール状況の自己評価〕，〔LUTS の肯定的な受けとめ〕，〔対処方略への手応え〕が抽出された．患者は，予防できない LUTS に対して，情動マネジメントを活用し，自身の排尿状況を評価したうえで，生活の中に自己管理を組み込んでいることが明らかとなった．第三部の研究結果として，SMS-LUTS-RP は，【排尿状態のモニタリング】，【LUTS による生活の支障への対処】，【医療者との協同】，【LUTS の改善に向けた訓練の継続】，【LUTS との共生】の 5 因子 18 項目から構成され，前立腺全摘除術後がん

患者のLUTSに対する自己管理を高次因子とする二次因子構造モデルが得られた．尺度全体のCronbach's α係数は0.871であった．また，SMS-LUTS-RP の合計得点と IPSS，KHQ の下位領域「全般的健康観」,「個人的な人間関係」を除いたすべての領域との間で有意な正の相関を認め，基準関連妥当性が確認された．以上のことから，SMS-LUTS-RP は，内的一貫性，内容妥当性，構成概念妥当性，基準関連妥当性が確認された．したがって，SMS-LUTS-RP は，前立腺全摘除術後がん患者の LUTS に対する自己管理を客観的に評価することができると考える．また，患者の認知や行動などを多側面から捉えることができ，LUTS と折り合いをつけながら療養生活を送っていくための支援につなげることができると考える．

≪結論≫

本研究は，前立腺全摘除術後がん患者の LUTS の経時的変化を明らかにしたうえで，患者の実体験に基づいた LUTS に対する自己管理尺度を作成し，尺度の信頼性と妥当性を確認した．SMS-LUTS-RP は，前立腺全摘除術後がん患者の LUTS に対する自己管理を客観的に評価でき，患者の自己管理状況を共通認識する際の指標として活用することができる．今後は，前立腺全摘除術後がん患者の LUTS に対する自己管理を支援するために，SMS-LUTS-RP を活用した看護介入プログラムを開発する必要がある．

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は，前立腺全摘除術後がん患者の下部尿路症状（Lower Urinary Tract Symptoms: 以下，LUTS）に対する自己管理尺度を開発することを目的としたものである．

第 1 研究では，前立腺全摘除術後がん患者のLUTSおよびQoLの経時的変化とそれらの関連を明らかにすることを目的に，システマティックレビューおよびメタアナリシスが行われた．その結果，患者の LUTS の経時的変化が明らかとなった．さらに LUTS の身体的関連要因は明らかとなっていたものの，心理社会的な要因との関連性の検討が課題であることが示された．

第 2 研究では，前立腺全摘除術後がん患者の LUTS に対する自己管理の様相を明らかにすることを目的に，質的研究が行われた．前立腺全摘術後がん患者 13 名を対象に半構造化面接を行い，得られたデータを質的内容分析の手法を用いて分析した．その結果，410 のコード，42 のサブカテゴリー，10 のカテゴリーが浮上した．カテゴリーとして，〔解決すべき問題の自覚〕，〔LUTS の対処方略の吟味〕，〔LUTS の改善につながる行動の取り入れ〕，〔LUTS の悪化をきたす行動の回避〕，〔生活への支障を見据えた工夫〕，〔LUTS によるトラブルへの対処〕，〔医療者や周囲との関係構築〕，〔排尿コントロール状況の自己評価〕，〔LUTS の肯定的な受けとめ〕，〔対処方略への手応え〕が抽出された．

第 3 研究では，前立腺全摘除術後がん患者の LUTS に対する自己管理尺度（Self-Management Scale for LUTS in Patients with Cancer following Radical Prostatectomy: SMS-LUTS-RP）を開発することを目的として，信頼性および妥当性の検証が行われた．

本研究の独創性は， LUTS に対する自己管理尺度を開発し，自己管理を既存の尺度にはなかった認知や行動等の多側面からとらえて QOL 向上を目指す点である．また特に第 2 研究において，前立腺がん術後がん患者特有の LUTS 自己管理についての新たな要素が抽出された点は，本研究の新規性が高いところである．また，尺度化することにより数量化による様々な知見が得られる可能性があり，今後の発展性が非常に期待される．

以上により，本論文は本学大学院学則第 13 条第 3 項に定めるところの博士（看護学）の学位を授与するに値するものと認める．

（主論文公表誌）

International Journal of Urological Nursing, in press
International Journal of Urological Nursing, 16(3), 234-244, 2022